

里見又太郎は義豊の子なれど、妾腹ゆえに疎まれ、晩年の義通の世話役に押し込まれていた日陰の存在である。これを擁して駆けつけた者たちは、口々に叫んだ。

「我らはうだつの上がらぬ在地の衆。民を苦しめるのは左衛門佐様だと、御傍衆から聞かされておりました」

その声に、義堯は訝しんだ。

「ならば、なぜそちらに附かぬ。我らに弓引いても、決して恨みにも思わぬぞ」

「我々は、騙されていたのです」

「騙されていた？」

「殿の狙いは、在地の利権を奪うこと。左衛門佐様はそれを諫めていたのです。そうとも知らずに、恥ずかしい」

彼らの言葉に、偽りはない。

ふと、義堯は又太郎をみた。

「ここににいる者らを生かせるのは、父ではない、権七郎殿しかない。皆はこのちも安房に必要な人材です。頼めるのは、権七郎殿だけなのです」

言っている意味が分からないと、義堯は呟いた。

「御傍衆に吹き込まれた言葉を信じたこの者たちに非はござらん。非があるのは父なのです。」

「一統」などと、夢のようなことを……」

又太郎は日陰の身だから、一生を日陰で生涯を終えていくだろう。

しかし、ひとつくらいは世に益あることを為したい。その答えが、義堯のもとへ皆を率いて馳せ参じることなのだ。さしたる警戒もなく、番所の囲みを抜けて、まんまと造海城まで彼らを導いたのも、偏に義豊の子ゆえのことであった。

「左衛門佐殿は先代の申しつけに従い、父を抑え込んでおりました。その父の暴拳を留め、里見の将来を託すのは、左衛門佐殿の嫡子・権七郎殿しかない。それが、ここに集う者たちの総意です」

義豊のもとでは生きていけない。

実堯の後継者である義堯にこそ従おうと、彼らは駆けつけたのである。

「又太郎殿は里見の嫡流、我は傍流。このこと、困りはせぬか」

「いや、権七郎殿がいいのです。儂はかつて、あなたの御父上に受けた御恩がござります。そのこと、死ぬまで忘れませぬ」

又太郎はかつて実堯が

「日陰の身をなんとかすべし」

と義豊へ掛け合ったことを忘れていなかった。

「いまこそ、あなたの父から受けた御恩を返すとき。なんなりと！」

「又太郎殿のご助力、心より御礼申す」

そう云って、義堯は固く手を握りしめた。

皆は口々に義堯を讃えた。

八月一日、真里谷信隆は本城へと引き上げた。のちにこの者は、約束通り家督を掌握し、義堯を擁護する姿勢を示すのである。

さて、義堯は海賊衆に加勢を頼み、北条と内応している信隆の密書を託した。

「北条相模守殿は信義に厚い御仁と聞いておるゆえ、何卒お頼み申すと、必ず伝えて参れ」

その間に、正木時茂は海路より朝夷郡に引き返して、山之城の救出に向かった。

五日の後、海賊衆は北条勢を引き連れて戻ってきた。首尾よく北条氏綱が助勢に応じたのである。

氏綱は江戸湾の制海権を巡り里見氏と対立していた。しかし、互いに不可侵を守り手を携えることこそ、氏綱が望んでいたことであった。利害は、一致したのである。

「海路の帰途、保田浦あたりに稲村のものと思われる軍勢を多数見かけました。こちらに向かうものと思われませぬ」

水軍からの報せに、義堯は主立った者を集めて軍議を開いた。妙案あらばということ、北条からの与力も同席となった。

造海城は海賊城で陸上での戦いに向いていないことから

「野戦」

という結論に達した。

舟で金谷の先まで兵を運び、そこで敵の退路を断ち切るという大胆な策が挙げられた。

「海賊衆は遠弓で蹴散らしてくれ。決戦は、妙本寺と定めたり」

義堯の号令に皆が応じた。

十十十

犬掛へ(4)

夢酔 藤山